



声優になりたての頃は、台本どおりに話すことばかり考えていたのですが、やがて監督や共演者などスタッフとしっかりと意思疎通をしないと成り立たないことに気づきました。特に実感したのは、主役をいただくようになってからです。初めて主役を演じたときは、ひたすら一生懸命演じていました。でもだんだんと周りが見え始めると、うまく演じるだけじゃだめなんですね。主役とは、みんなを引っ張り、同時に

う受け止めて返すかが重要なのだと。例えば、距離感一つ取っても人によってそれぞれ異なります。「おーい」と声をかけあうとき、向こうが5mの距離の感覚で声をかけてきたのに、自分が10m離れて返したら変ですよ。そういうト書きに書いていない距離感をお互い瞬時に判断することが必要なんです。相手がこう言ったら自分はこう返す。いかに空気を読めるかという事です。

みんなに支えられている存在なんです。——主役など重要な役を演じられることが多い小野さんですが、その年に最も印象に残る活躍をした声優に贈られる2009年度の「声優アワード」で主演男優賞を受賞されたとき、どうお感じになりましたか。最初話を聞いたときは、「ぼくでいいのかな」という思いが強かったです。主演は、演劇や舞台で言う「座長」という意味合いが含まれていると思うんですね。役を演じるだけでなく、その物語の真ん中で役を全うしながら作品全体を引っ張っていく。さらに周りのスタッフともコミュニケーションを取りながら作品づくりに深くかかわっていく。周りを盛り立て、周りから信頼され、責任をもつ。そのようなさまざまな力がないと真ん中には立てないと思うんです。実は、ぼくはもともと人見知りで、この仕事を始めるまでは人とコミュニケーションをとるのが大の苦手だったんです。当然、人望もありませんでした(笑)。だからこんな自分でもいいのかな、と。でも、周りのみんなが心から喜んでくれる姿を見るうちに、この賞はいっしょに作品にかかわってきたすべての人たちにいただいた「ご褒美」だと思ふようになりました。——最近読み聞かせのイベントに参加されるなど、声優として幅広い仕事をされて

いらつやいますね。声優の仕事は、アニメにしてもドラマの吹き替えにしても、不特定多数に向けて録音します。でも、読み聞かせは相手が明確で、目の前にいる。そこが大きな違いです。ですから、読み聞かせでは目の前にいるたった一人に聞かせるつもりで、どう読めばその人が頭の中に情景を描くことができるか、心に響くかを考えながら話します。多くの実家は商店で、両親ともに忙しかったため、なかなか読み聞かせをしてもらう機会がありませんでした。でも、たまに母親に読んでもらったことを思い出しながら、何度も本を開いては読んでいました。読むというより、話を思い出して情景を想像したといったほうが近いかもしれません。母親が心を込めて読んでくれた1回の話を何度も何度もだいに反芻する。それが、多くの読書の原体験であり、情景を思い描く力の源になっている。このことは役者としても役立っていると思っています。ある読書のシンポジウムで、「お話を抱きしめる力が必要だ」というすてきな言葉を聞きました。読み聞かせの魅力はまさに、「お話を抱きしめる力」を育てることにあると思います。これからも、聴いた人の心に残る読み聞かせをしていきたいと思っています。(取材・まとめ/関原美和子)

※文化庁文化芸術懇談会(平成22年1月24日文化庁、高知県教育委員会共催)のパネルディスカッション「読書が子どもたちの創造性と表現力をはぐくむ」に小野大輔さんがパネリストとして参加。

声優

小野大輔

プロフィール

1978年高知生まれ。声優。日本大学芸術学部放送学科在学中にラジオ番組制作にかわり、ラジオドラマの出演者を務めたことをきっかけに声優を目指す。2005年テレビアニメ「AIR」の国崎往人役でアニメ初主演。06年「涼宮ハルヒの憂鬱」の古泉一樹役を演じ、知名度を上げた。08年「みなみけ」保坂役や「レンタルマギカ」影崎役などで07年度第2回声優アワードサブキャラクター男優賞(助演男優賞)を受賞。10年「黒執事」セバスチャン・ミカエリス役などで09年度第4回声優アワード主演男優賞を受賞。このほか、ゲーム「ファイナルファンタジーXIII」スノウ・ヴィリアース役や外国映画の吹き替え、本人名義のCDリリース、ラジオパーソナリティとしても活躍。10年高知県観光大使に任命。



声優は「耳」が大切

——熱血漢にクールガイ、ときには2枚目半とさまざまなキャラクターを演じていますが、役づくりで心がけていることはありますか。

台本を読みながら、演じるキャラクターの目標や夢は何か、目標に到達するためにどんな行動を起こしているのかという背景を考えます。感情を表に出さないクールなキャラクターでも、夢や目標が理解できれば、謎めいた行動の裏にある理由も見えてきます。

もちろん、台本を読んだだけでわからないときには、制作スタッフに聞いてみます。特にぼくたち声優がかかることが多い音響監督とのコミュニケーションはとて大切ですよ。

台本を読み込む力とスタッフとのコミュニケーション力。この二つの力があつてこそ、キャラクターを自分のものにする事ができると思っています。

——声優にはコミュニケーション力がいいのだと。

そうです。役者の先輩から、「声優は声がいいことより耳がいいことのほうがだいじだ」と教わりました。相手のセリフをど